

三好市「旧東祖谷山村」の伝説

史学班（徳島史学会）

湯浅 安夫*¹ 西田 素康*²

要旨： 世代交代と過疎化により伝説を語ってくれる人が殆どいなかった。やはり伝説の調査に参加しているので、語ってくれた伝説を中心にしたかったが、文献などで集めたものを分類し、一覧表にして旧東祖谷山村の伝説の背景、他の町村とどう違うかというその特色、少ないが語ってくれた伝説を紹介することにした。

キーワード： 安徳天皇，平国盛，^{すげおい}管生家，喜多（北）家

1. はじめに

祖谷山は伝説の宝庫であり、平家伝説は全国的に有名である。その祖谷山の伝説を調査することは、伝説に興味を持つものとして長年の夢であった。あらかじめ文献などで調べてみると、たくさんの伝説がある。その上に現地を訪れ、どのような人が、どのような伝説を語ってくれるか、その夢を実現すべく入山した。しかし「こんな話がありました」、といえる生々しい伝説が殆どなかったことは残念である。何処も世代の交代がすすみ、生活様式が変わり、昔のように昔話や伝説を子や孫に語って聞かせる機会が少なくなっている。その上、過疎化がすすみ、語りべとなるべき人達も村外へ出て行った。世代交代と過疎という壁のなか、献身的に協力して頂いた方々に支えられて旧東祖谷山村の伝説の調査を終えることができた。

2. 伝説の背景

祖谷は全国的に有名な三大秘境の1つである。旧東祖谷山村の行政区画は、228.62平方^キあり、広さは阿南市・木頭村について3位であったが、平成の

合併により、池田町・井川町などと三好市となった。三好市の広さは県下1で、三好市の約32%の面積を占めるのが、旧東祖谷山村である。旧三好郡の南東部を占める東祖谷山は、剣山の西斜面より流れ出る祖谷川のほとり、多くの高山に囲まれた峻険な土地で、別天地と呼ばれるほど、秘境にふさわしい山村である。

伝説によれば、大昔、はじめて開拓したのが^{えいらの}恵伊羅御子と^{おののうば}小野嫗であった。この地の平家の落人伝説は有名で、落人の住み着くにふさわしい土地ともいえる。平地は少なく、生計を立てるには厳しい土地で、過疎の進んでいるところである。そのような自然環境や歴史を背景、以下紹介するような多くの伝説が語り継がれている。

3. 伝説の分類一覧表（表1）

人物に関するもの	平家と安徳天皇・安徳天皇衣掛けの松・安徳帝の火葬場跡・平国盛と鉾神社・アマトチガワ・久保の毘沙門さま・深淵・ ^{えいらの} 恵伊羅御子と ^{おののうば} 小野嫗・皇宮の太鼓田・狼師の権太・空を飛ぶ男・力持ちの話・落合の丹次郎・元井の共及虎三郎・行方不明になった老爺・隠居
----------	---

* 1 徳島市住吉1丁目9-29

* 2 鳴門市撫養町立岩字7枚124

動物に関するもの	馬岡神社・おかま（淵）・熊うちの呪い・菅生笹平のひひ猿猿に蒸された話・宮のなる猪・菅生谷の大蛇・白い谷の大蛇落合の大蛇退治・釜淵の蛇・五輪の塔と犬の墓・大蛇の通った跡・落合峠の大蛇
社寺・神仏に関するもの	円福寺のせせり仏・九鬼の氏神さま・水神さま・剣神社・栗枝渡八幡神社・大原大明神・白髪神社・平家の墓所・定福寺と十二社権現・京上の七人塚
木や石に関するもの	鉾杉（国盛杉）・松の門松・七本松・歯形笹・石仏・かなお石（鼎石）・装束石・矛立石・酔の木・呼び石・おくす岩・塔の岩と宝蔵石
旧家に関するもの	阿佐家・源氏の菅生家・深淵の開拓下窪家・銘刀むかで丸の俵家
地名に関するもの	お化けの淵・深淵と大師淵・琵琶の谷と血の池・紫の泉・鶴亀野池・つけのえさん
水に関するもの	お化けの淵・深淵と大師淵・琵琶の谷と血の池・紫の泉・鶴亀野池・つけのえさん
妖怪・変化に関するもの	ケシボウズ・樫尾の山姥・山女郎・腕山の大蛇・池のとうの大蛇・うとおどろの山爺・鎖谷の大蛇・鎖谷の狸・名頃の山姥・大枝の蛇淵・狸に化かされた子守さん
その他に関するもの	焼畑・平家の赤旗・人食い草・竜宮さんに嫁入りした娘・菅生のいらすの山・熊穴の住人・呼岡・久保の土地屋・東平の山崩れ・胡瓜食わず・黒塗りの真弓・奥祖谷のかずら橋・平家屋敷・赤旗と白旗のたたかい・粉ひき歌

4. 伝説の特色

前記一覧表のように東祖谷には大変伝説の数が多い。その数100をこえる。ここの平家伝説は有名であって、その研究も進んでおり、たくさんの本が出版されている。伝説の数が多く、研究も進んでいることを第一の特色としたい。その内容は平家伝説が中心で、安徳帝が平国盛など平家の武者に守られて祖谷に逃れてきて亡くなった、という話を中心に広いところにたくさんの伝説があり、それに派生するような形で、県下の山間部に平家伝説がある。しかも祖谷では源氏の白旗も保存されていて、源氏にまつわる伝説もあるのは特色としてあげることができる。

他に県下にたくさんある狸の話は意外と少ないこ

とと、山間部に多いオオカミや熊の話はほとんど聞かないことを特色としてあげておく。

次に祖谷の有名な平家伝説を始め、世代交代がすすみ語ってくれる人も少なくなったが、その数少ない伝説を中心に、そのいくつかを紹介したい。

5. 伝説の紹介

○平家と安徳天皇

讃岐屋島の合戦で敗れた平家の門脇中納言教盛の第二子従四位越後守平国盛は、手勢百余騎をもって、安徳帝を奉じ讃岐白鳥から大山を越え、三軍に分かれ一軍は安徳帝を奉じ、一軍は先頭、一軍は国盛自ら率いて追っ手の敵を防ぎつつ、重臣32人を連れて、寿永2（1183）年吉野川を遡り、旧三好郡井内谷と東祖谷の境にある寒峰の峻険を越え、東祖谷に入り、大枝岩屋に身を隠した。その時は12月大晦日であった。翌朝、名主喜多氏の宅へ行くと、元旦の酒宴を催していた名主は国盛の立ち入りを拒んだので、ついに合戦となり、喜多氏は滅ぼされた。国盛は大枝にしばらく滞在していたが、阿佐常陸守の招きにより阿佐に引き移り定住した。

安徳帝を奉ずる人は、麻植郡より石立山へ護衛して行き、そこで暫くいたが、国盛が祖谷を平定したことを聞いて祖谷に入った。久保大宮の下に樹木が茂っている処を通るとき梢倒しにして通ったので「鉾伏せ」という。帝が石の上に立ち装束を着替えたので、その石を「装束石」という。谷を渡るとき、帝を手から手へ移したから、そこを「皇上手橋」という。これは久保の墓層にある。これより宇中上に移り暫く滞在しているとき、不思議なことに寒中蛙の啼く声を聞いたので、「朕の住むところは蛙の鳴く所なり」と仰せられた。そこより川下に下り栗の枝を切り、橋として渡ったので、その付近を「栗枝渡」と呼ばれるようになった。その後、川下の京上の平地に宮殿を造っていたが、大水のため崩壊し、再び栗枝渡に移り、間もなく崩御した。

（「日本伝説大系第十二巻」）

○安徳帝の火葬場跡（図1）

栗枝渡八幡神社の後の山を「ミヤバエ」と呼んでいる。「ハエ」とは林または森のことで、宮の森、神社の森か安徳帝の陵という意味か、誰も入ってはい

けない聖域になっている。

八幡神社の拝殿の右手にも聖域がある。ここには杉の大木が茂っていて、それに囲まれるように二坪ばかりの土地がある。そこには平石を積み重ねて一段と高くなっていて、廻りにしめ縄をはりめぐらしている。ここへは誰も足を踏み入れてはならないと固く禁じられているところで、どんなに厳しい冬でも雪が決して積もらないと言われている。ここを「安徳帝の火葬場跡」と呼んでいる。



図1 安徳帝の火葬場跡

安徳帝は京上の天皇の森の近くで宮殿をいとなまれていたが、秋の大水で宮殿は流されてしまった。帝に従って平国盛らは御座所に適した場所を探した。下瀬のあたりを通っていると、秋だというのに蛙の声が聞こえてきた。その声のするあたりへ行ってみると、そこは南に面した温暖な土地が広々と開け、展望も大変よい場所であった。このあたりは昔、温泉が沸きでていたが、天保年間の大地震から出なくなったという古老もある。

ここに仮の御所を造営して、帝の住まいとした。帝もこの地が気に入られ、花敷のあたりを散策したりして平穩に過ごされていたが、祖谷山の厳しい気候に、幼い帝の健康はむしばまれて、この地で崩御された。遺体は火葬されてこのお花敷あたりに葬られたといわれている。

この「ご火葬跡」は、東祖谷山村の有形文化財に指定されている。(「祖谷の語りべ」)

○平国盛と鉾神社

平国盛は安徳帝のお供をして、祖谷まで落ち延びて来たが、大枝までやってきてこの地に鉾を納めた。その鉾を祀ったのが鉾神社であるといわれている。また一説には鉾を納めたのは安徳帝であるという。なお境内には国盛手植えの杉というのが今も残っている。(「祖谷の語りべ」)

○平家の墓所(図2)

平家屋敷の200メートルほど手前、車道が大きくカーブして阿佐部落へ入るところ、川手にこんもりと茂った雑木林がある。その林の中に「平家の墓所」(阿佐氏の墓所)がある。「祖谷山日記」には、「従四位越後守国守(盛)朝臣は、この山の中に落ち延、ここにとどまっていたが、承元2(1207)年4月10日に亡くなった。法名を定福寺殿順照道義(定福寺殿前越州従四位販真順照尊義)とつけた。墓は石を積み上げて檜しきみを植えている。」と書かれている。ところが他の文書には、国盛は定福寺に葬られたと書かれている。

平国盛を始めとして、6代目までの墓は、国盛が建立した定福寺に葬られている。定福寺は御山(尾山)という所に、十二社権現と並んで建っていた。大層広い寺域をもった大きなお寺であったらしい。阿佐部落に残る「ボウズヤシキ」とか「テラヤシキ」などの地名もこの寺に関係した地名でその規模の大きさがわかる、という言い伝えがある。ところが、この定福寺と十二社権現は、大永7年(1527)の大



図2 平家の墓所(阿佐家の墓)

洪水のとき、山崩れによって流失してしまった。そのとき、阿佐家6代までのお墓も跡形もなく失われてしまった。7代佐渡守盛実は、三好氏に味方して板東の役で戦死し、金丸（旧三加茂町）長善寺に葬られている。したがって、前記の平家の墓所に眠っているのは、8代紀伊守盛次から後の各代の主のようで、墓碑がないのでわからない。墓に墓碑がないのは、初代国盛の残した家訓によるとの言い伝えもある。

平家再興のよりどころであった安徳帝は、祖谷入山一年あまりで亡くなり、国盛の意図はくじかれた。源氏の追討から逃れるためにも、身分や姓名を隠す必要があったので、墓碑を建てるのを禁じたのではないともいわれている。（田岡正善さん談）

○源氏の菅生家（図3）

約1300年程前、淳仁天皇の天平宝治7年（763）、菅生王は阿波守となって当時阿波の国衙こくがのあった国府に下向して、数々の治績を残したが、弓削道鏡の専横を憤り、霊峰剣山の山懐祖谷の里に引きこもり、ここに住む人々の信望厚く、豪族菅生家が生まれたといわれ、祖谷の菅生の地名はこうして生まれたと伝えられる。豪族菅生氏はその後、鎌倉にいき鶴岡八幡宮を守護する役に任じられたと伝える。以来、幾百年の年月がたち、源平合戦が渦巻き、敗れた平家は四散し、その残党を追って新羅三郎義光の後裔という辺見冠者小笠原義清の長男清光と次男の加賀見信濃守遠光の両将は源氏の白旗を陣頭にたて落ち行く平家の残党を追って四国に渡り、讃岐山脈を越



図3 菅生家と低湿地

え、霧端（切幡）城を攻めた。弟遠光も仏生山から切幡城に進撃したが、平家の落武者は祖谷山にたて籠り、その一部は剣山山脈を突破して土佐に落ち延びたので、兄弟は八田（現半田町）に伊月城を築き、さらに土佐に平家の残党を急迫した。その後清光兄弟は阿波にかえり半田口・大旗の城塞を築き、これを根拠地としてここに永住したが、兄清光は多年の名家菅生家の血筋が絶えたのを惜しみ、祖谷山に入って菅生姓を名乗ったと伝えられている。

菅生家には「源氏の白旗」が家宝として伝わる。この白旗は中央上部に「八幡大菩薩」の五文字が記されていて、その下に三階菱の定紋が鮮やかに浮かんでいる。三階菱は新羅三郎義光から伝わる小笠原家の定紋で、鎌倉鶴岡八幡宮に武運長久を祈って神霊を込めた神旗といわれ、源氏の八幡太郎義家の弟、新羅三郎義光の手から菅生家に伝えられたものという伝承がある。現在、この白旗は三加茂町の内田家が所蔵している。

今も菅生家の屋敷は残されていて、屋敷の西側は湿地がひろがり昔は水田が広がっていた。この湿地は底が知れないといわれ、昔、湿地では竹をあんでその上で田んぼの仕事をしていた。ある年、菅生家のお嬢さんが田植えを手伝っていて、田んぼに落ち込んで出てこれなかったという伝説がある。

（田中博幸さん談）

○北六郎三郎の墓（図4）

六郎三郎の墓は、下瀬の土居跡地に接して建っている。石作りの宝篋印塔であるが、大正14年隣家の火災の際破損して、相輪・隅飾りなどを失っているが、推定して高さ2メートル余りの立派なもので、礎石には祖谷36名主の名が刻まれていた。

塔身は寛永12年（1636）建立とあり、年号を記した碑で最も古いものである。墓の南側に庚申塔があり、その刻銘「祖谷山大枝喜多六郎三郎」という名がある。むかしはこの墓の前ははき物をぬいで通ったという伝説がある。

六郎三郎は旧美馬郡一字の出身であるが、蜂須賀家政の命をうけ祖谷山一揆を平定、この地で祖谷山の統治にあたり、その功績により藩主より感状を受けている。

（近藤森行さん談）



図4 北六郎三郎の墓

○粉ひき歌

祖谷の粉ひき歌はいろいろ文句が違うのが歌われているようである。町史にも数種類記載されているが、中窪さんは90歳と思えない若々しい声で歌ってくれたのを書いておく。

「小島峠で 菅生みればよー あいもかわらぬ
徳島よのさいよいよい 菅生よいとこ一度はおいで
よー 底のない田で米とれるよ さのよいよい こ
ひき婆さんうたなど唄えよ お嫁さんかと思われる
よ さのよいよい。」

「祖谷のかずら橋や蜘蛛の糸のごとく 風もふか
んのに ゆらゆらと 風もふかんのに ゆらゆらと
祖谷の源内さん ひえの粉にむせた 茶がなかつ
たら息とまる なかったら なかったら 息とま
る。」(図5) (中窪ハルエさん談)



図5 奥祖谷の2重かずら橋

6. 語ってくれた人

田中 博幸	昭和9年生	久保
田岡 正善	昭和2年生	和田
西谷 清	昭和19年生	京上
々 千賀子	昭和23年生	京上
中窪ハルエ	大正4年生	落合
近藤 森行	大正15年生	下瀬
吉田 和男	昭和22年生	京上

参考文献

- 三好郡東祖谷山村誌編集委員会(1978)「東祖谷山村誌」. 東祖谷山村誌編集委員会.
- 横山春陽(1980)「阿波伝説集」. 歴史図書社.
- 小西国太郎(1965)「秘境祖谷物語」. 祖谷山岳会.
- 東祖谷山故事収集委員会(1990)「ひがしいやの民俗」. 東祖谷山故事収集委員会.
- 谷口秋勝(1983)「秘境の祖谷山神話と伝説」. 徳島県教育印刷株式会社.
- 福田晃編(1983)「日本伝説大系第12巻」. みずみ書房.
- 藤澤衛彦(1919)「日本伝説叢書阿波の巻」. 日本伝説叢書刊行会.
- 俵裕著(1993)「祖谷」. 徳島県出版文化協会.
- 祖谷地方昔話集(1973)柳田国男編 武田明著.
- 阿波の語りべ(1988)徳島県老人クラブ連合会.
- 祖谷の語りべ(1991)森本徳著 祖谷のかたりべ編集・執筆委員会編.